Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-16

小学校体育に関する大学生の授業力量

江藤，真生子

(Degree)
博士（教育学）
(Date of Degree)
2020-09-25
(Date of Publication)
2022-09-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7833号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007833

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　約

氏　　名　江藤　真生子
専　　攻　人間発達専攻
指導教員氏名　山口 悦司

論文題目

小学校体育に関する大学生の授業力量

論文要約

本研究の目的は，小学校体育に関する大学生の授業力量を解明することである。この目的を達成するために熟練教師の授業力量の調査を実施し，大学生の調査結果と熟練教師の調査結果を比較し，大学生の授業力量と熟練教師の授業力量の共通点と相違点を明らかにする。また，熟練教師の調査結果と比較して特徴づけた大学生の授業力量と，小学校教師や中学校および高等学校教師（以下，中・高教師とする）ならびに中・高教師志望の大学生を対象とした先行研究で解明された授業力量と比較し，大学生の授業力量の特徴について議論を行う。本研究の成果は，これまで明らかにされていなかった小学校体育に関する大学生の授業力量の特徴を解明できたことであり，体育科教育学における教師教育研究への貢献を期待できるであろう。

本論文は，6 つの章から構成される。各章の概要は以下の通りである。第 1 章では，小学校体育の大学生の授業力量に関する問題の所在と目的を導出し，目的を達成するための研究方法について述べた。まず，授業力量は信念，知識，教授技術の要素で構成され，各要素間には関連性があることを定義した。次に，授業力量がどのように解明されてきたのかについて，国内外の体育科教育学における教師教育研究の授業力量に関する先行研究をレビューした。レビューの対象は，国内外の代表的な体育科教育学に関する学術誌に掲載された教師教育研究の授業力量に関する文献とした。海外文献に関しては，体育・スポーツ学分野のデータベースである SPORTDiscus™ with Full Text を用いて文献を検索した。レビュー文献や研修やプログラムの評価に関する文献を除いた 55 編を選定した。国内文献については，国内の代表的な体育科教育学関連学術誌から 28 編を選定した。これらを合わせた計 83 編をレビューの対象とした。レビューの結果，小学校体育に関する大学生の授業力量の実態が把握されていないことが問題であり，その実態の解明が喫緊の課題であることを明らかとした。この課題を解決するために，大学生の授業力量を解明することが目的となることを導出した。続いて，授業力量を解明するための研究方法の概要を説明した。本研究の研究方法は，事例研究ならびに大学生の授業力量と熟練教師の授業力量の比較であった。

第2章と第3章では，小学校体育に関する熟練教師の信念，知識，教授技術を実証的に明らかにした。第2章は，熟練教師の信念と知識に関する調査の結果である。信念については，対象は，体育専科教師1名（教職歴19年）とその同僚教師18名（教職歴6年以上5名，11年以上9名，21年以上4名）であった。データ収集の方法は，信念に関する質問紙調査法および半構造化面接調査法であった。収集したデータをKJ法により分析した結果，熟練教師は，児童の実態把握や環境整備，技能向上を目指した指導，児童に身につけさせたい内容などを重要であると考えていることを明らかにした。

また，熟練教師の知識について，対象は体育専科教員1名であった。データ収集の方法は，知識に関する半構造化面接調査法であった。分析に際しては，教材内容に関する回答を教材内容に関する知識領域（吉崎，1997）に分類した。その結果，熟練教師の教材内容についての知識は，運動の行い方に関する知識や運動を分解した要素に関する知識，その要素の再構成に関する知識であった。また，熟練教師の教材内容と児童についての知識は，児童の発達段階に対応した系統性に関する知識と技能習得のための運動のコツに関する知識であった。さらに，熟練教師の教材内容と教授方法についての知識は，児童の発達段階に応じた指導に関する知識とポイントを押さえた簡易化した教授方法に関する知識であった。

第3章は，小学校体育に関する熟練教師の教授技術の調査の結果である。対象は，2名の熟練教師（ともに教職歴10年以上）であった。データ収集と分析の方法は，以下の通りであった。まず，2名の熟練教師が行った各1単位時間の体育授業のビデオデータから逐語記録を作成した。次に，イベント記録法（シーデントップ，1988）を応用して，各教授技術の頻度を算出した。さらに，熟練教師が体育授業のヤマ場で用いた教授技術を検討した。教授技術の頻度を算出した結果，熟練教師が指示やフィードバック，補助的相互作用を多用したことを明らかとした。また，熟練教師は，ヤマ場において分析的発問を行い，児童とのやりとりにより動き方を引き出し，課題を焦点化する教授技術を用いたことを明らかにした。

第4章と第5章では，小学校体育に関する大学生の信念，知識，教授技術を実証的に明らかにした。第4章は，大学生の信念と知識に関する調査の結果である。大学生の信念について，国立大学の教員養成学部の小学校体育の指導法を受講した3年次の大学生27名を対象とした。データ収集の方法は，信念に関する質問紙調査であった。収集したデータをKJ法により分析した結果，大学生は，児童の実態把握や安全管理，個に応じた指導，児童に身につけさせたい内容などを重要であると考えていることを明らかにした。

また，大学生の知識について，国立大学の教員養成学部の小学校体育の指導法を受講した3年次の大学生33名を対象とした。データ収集の方法は，知識に関する質問紙調査であった。得られた回答を教材内容に関する知識領域（吉崎，1997）に分類した。その結果，大学生の教材内容についての知識は，運動の行い方に関する知識と運動様式に内在する安全に関する知識であった。また，教材内容と児童についての知識は，学習指導要領の目標や特性論の視点からとらえた運動に関する知識と，運動を行う際の児童の安全に関する知識であった。さらに，教材内容と教授方法についての知識は，指導する際の安全に関する知識であった。また，3つの知識領域には，安全に関する知識の記述が示された。

第5章は，大学生の教授技術に関する調査の結果である。国立大学の教員養成学部で教育実習に参加した3年次の大学生2名を対象とした。データ収集と分析の方法は，以下の通り

であった。まず，2名の大学生が行った各1単位時間の体育授業のビデオデータから，逐語記録を作成した。次に，イベント記録法を応用して，各教授技術の頻度を算出した。また，体育授業のヤマ場の大学生の教授技術を検討した。教授技術の頻度を算出した結果，2名の大学生が，補助的相互作用や指示などを多用していたことを明らかにした。また，2名の大学生が，ヤマ場において分析的発問を用いたが，児童に熟考する間を与えなかったことを明らかにした。

最後の第6章では，前章までに明らかとなった大学生の授業力量について総合的に考察を行った。まず，大学生の授業力量の調査結果と熟練教師の授業力量の調査結果を比較し，共通点と相違点を明らかにした。次に，中・高教師ならびに中・高教師志望の大学生，小学校教師の授業力量に関する先行研究との議論を行った。これらの議論を通して，小学校体育に関する大学生の授業力量の特徴を解明した。小学校体育に関する大学生の授業力量の特徴は，以下の通りであった。まず，小学校体育に関する大学生の信念は，授業の実施段階において計画的な指導や安全管理が重要であるとした考えであった。次に，小学校体育に関する大学生の教材内容についての知識は，運動様式に内在する安全に関する知識であった。また，大学生の教材内容と児童についての知識は学習指導要領の目標や特性論の視点からとらえた運動に関する知識と，運動を行う際の児童の安全に関する知識であった。さらに，大学生の教材内容と教授方法についての知識は，指導する際の安全に関する知識であった。くわえて，大学生のすべての知識の領域には，安全に関連する内容が含まれていた。最後に，小学校体育に関する大学生の教授技術は，励ましや受理を多用していたことであった。また，ヤマ場における大学生の教授技術は，分析的発問の後，児童の回答を待つことができず，次の活動の指示と説明を行っていたことであった。

続いて，この大学生の授業力量の特徴を基に小学校体育に関する初任者研修への示唆を議論した。議論に際して，授業力量の要素間の関連性を仮説的にとらえた大学生の授業力量モデルを提案した。仮説的な授業力量モデルを初任教師の授業力量とみなし，その初任教師の授業力量と初任者研修の指導内容を比較し，初任者研修の課題を議論した。小学校体育に関する初任教師の授業力量は，信念とそれに関連する知識を保持しているものの，関連する教授技術を行うことができないといった問題を抱えているととらえられた。初任教師の授業力量が抱える問題に対して，初任教師の授業力量と初任者研修の研修内容にギャップが生じていることが課題となった。ギャップとは，初任者研修が初任教師の授業力量の問題の解決となっていないことであった。この課題に対して，指導者に強制されるのではなく，初任教師の信念と知識を活かして初任教師が教授技術を獲得する初任者研修となることが解決につながると示唆を提案した。